

仙台市 女性の暮らしと困難に関する実態調査

18歳～39歳対象

〈仙台市女性の暮らしと気持ちのアンケート〉概要版

仙台市と（公財）せんだい男女共同参画財団では、仙台市内の若年女性が抱える問題やニーズを明らかにし、支援施策の方向性を探るため、18歳から39歳までの女性を対象とした「仙台市女性の暮らしと気持ちのアンケート」を実施しました。また、アンケートの結果を補完するものとして、困難を抱える若年女性を対象とした「当事者ヒアリング」を行いました。

調査概要

▶ 報告書 第Ⅰ部 (P1)

■ 仙台市 女性の暮らしと気持ちのアンケート

| | |
|---------------|---|
| 調査対象 | 仙台市内に居住する、18歳から39歳までの女性5,000人 (住民基本台帳より無作為抽出) |
| 調査方法 | 郵送配付・郵送回収（ウェブ回答併用）、無記名・自記式 |
| 調査期間 | 2022年9月16日（金）～2022年10月7日（金） |
| 調査項目 (33問) | <ul style="list-style-type: none">・現在の暮らしについて（生活満足度／困りごとなど）・心の状態や人間関係について（自己肯定感／生きづらさ／心の健康状態／味方になってくれる人など）・これまでの出来事や体験などについて（新型コロナウイルス感染症の影響／東日本大震災の影響／過去の傷つき体験の影響など）・女性に対するサポートなどについて |
| 有効回答 | 1,649人（有効回答率33.0%） 郵送回答629人 ウェブ回答1,020人 |



▲ 調査協力依頼チラシ

■ 当事者ヒアリング

| | | | |
|------|---|--|------------------|
| 調査対象 | 仙台市内に居住する、困難を抱える若年女性当事者9名 | | |
| 調査方法 | 対面での聞き取り調査 | 調査期間 | 2022年12月～2023年1月 |
| 調査項目 | <ul style="list-style-type: none">・支援機関につながるまでの経緯・15歳当時の状況 | <ul style="list-style-type: none">・支援につながったことでの変化・望ましい支援のあり方 など | |

■ 調査の設計や実施体制など

- 本調査の設計にあたり、困難な状況にある女性を次のように定義しました。

経済基盤が脆弱である／暴力・ハラスメントの被害を受けている／人間関係やメンタルヘルスの問題を抱えている／ジェンダーバイアスの影響を受けている／これらの結果、自己決定力、自分の人生を主体的に生きる力、受援力、困難から立ち直る力が弱い状態にある

- 「若年女性の困難な状況の背景には、過去の傷つき体験の影響があるのではないか」という問題意識のもと、過去の傷つき体験が及ぼす悪影響について調べ、困難の未然防止や支援の手立てを考える材料としました。また、格差研究などでよく用いられている「15歳当時の暮らし向き」を問う設問を設け、子ども期の貧困とその後の困難の関係にも注目しました。
- 本調査の設計・分析については、有識者である大崎麻子氏（特定非営利活動法人Gender Action Platform 理事）、神林博史氏（東北学院大学 教授）の助言・協力を得て実施しました。
- アンケート調査に先立ち、若年女性支援者へのヒアリング調査を実施し、調査票作成の参考にするとともに、当事者ヒアリングの対象者をご紹介いただきました。

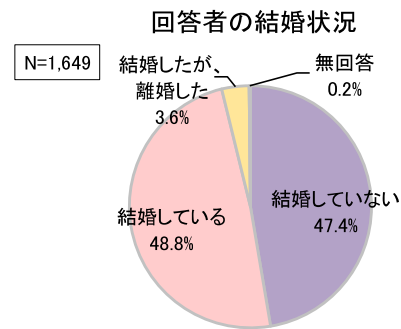
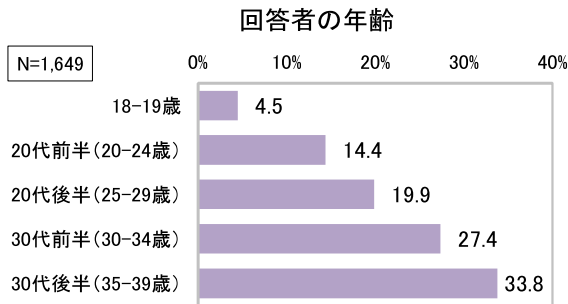
アンケート単純集計結果の分析 ▶第II部 (P5)

仙台市内の若年女性を対象とした「仙台市女性の暮らしと気持ちのアンケート」では、1,649人から有効回答がありました。単純集計の結果と一部年代別クロス集計の結果をまとめました。

1 回答者の属性

- ✓ 回答者の約6割（61.2%）が30代。「結婚している」と「結婚していない」が、ほぼ同じ割合。

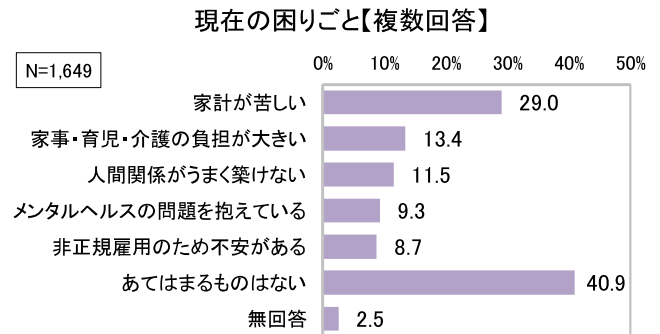
▶第II部第1章-1,2 (P5)



2 現在の暮らしについて

- ✓ 6割弱（56.5%）が現在の困りごとがあると回答（1つでも何らかの困りごとがあると回答した人の割合）。困りごとの上位は「家計が苦しい」（29.0%）、「家事・育児・介護の負担が大きい」（13.4%）、「人間関係がうまく築けない」（11.5%）。

▶第II部第2章-2 (P10)



3 心の状態や人間関係について

- ✓ 約5割（51.4%）が生きづらさを感じている（「なんとなく、生きづらさを感じる」の項目について21.0%が「そう思う」、30.4%が「どちらかといえばそう思う」と回答）。

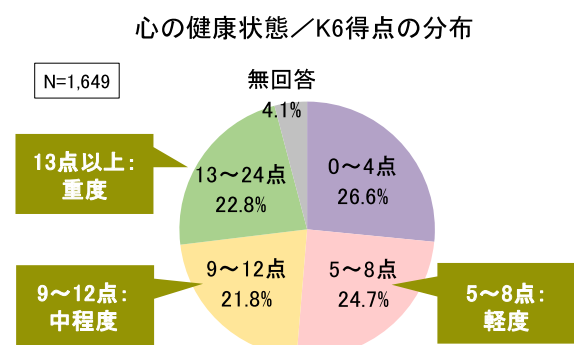
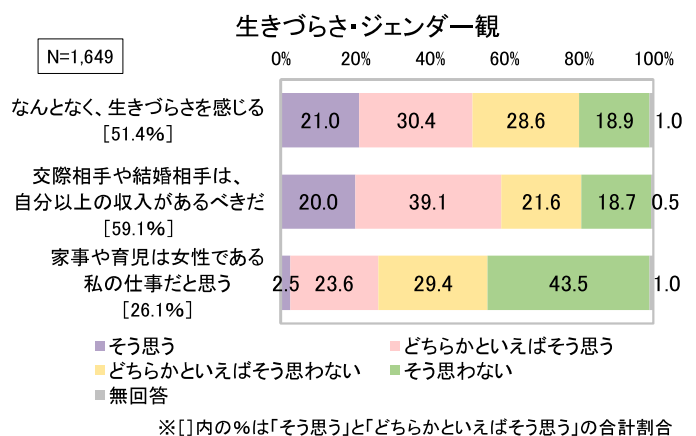
▶第II部第3章-1 (P12)

- ✓ 「交際相手や結婚相手は、自分以上の収入があるべきだ」の項目に肯定的な考えを持つ人は約6割（59.1%）。「家事や育児は女性である私の仕事だと思う」の項目に肯定的な考えを持つ人は3割に満たなかった（26.1%）。

▶第II部第3章-1 (P12)

- ✓ 心の健康状態（メンタルヘルス）を測定する尺度である「K6（ケイ・シックス）」得点では、精神的不調の度合いが「中程度」（9～12点）が21.8%、「重度」（13点以上）が22.8%だった。

▶第II部第3章-2 (P15)



4 新型コロナウイルス感染症や東日本大震災の影響について

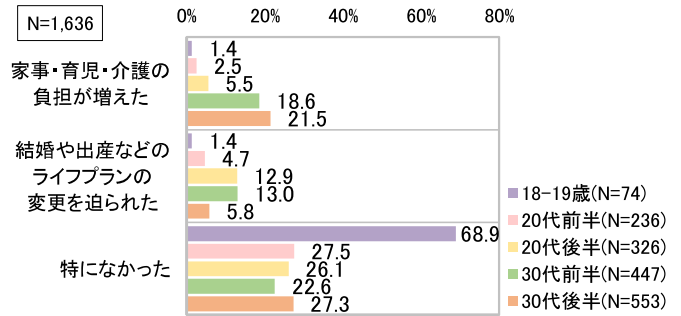
- ✓ 新型コロナウイルス感染症の影響を問う設問では、30代で「家事・育児・介護の負担が増えた」が突出しており、家庭内におけるケア役割が強化されたと考えられる。20代後半～30代前半では「結婚や出産などのライフプランの変更を迫られた」との回答が他の年代より特に高い。

▶ 第II部第4章-1 (P19)

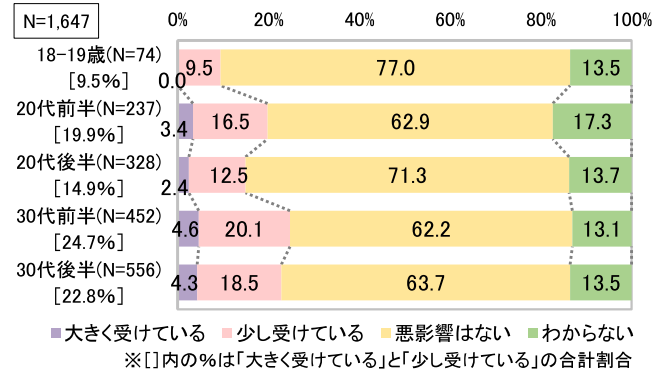
- ✓ 東日本大震災の影響を問う設問では、今の暮らしや心身が震災の悪影響を受けていると回答した人の割合は、30代（震災当時19歳～28歳）が他の年代と比べて高く、震災当時、進学・就職・結婚などライフステージが変わる時期であったことが影響していると考えられる。

▶ 第II部第4章-2 (P22)

新型コロナウイルス感染症の影響一年代別【複数回答】



東日本大震災が暮らしや心身に与えた影響一年代別

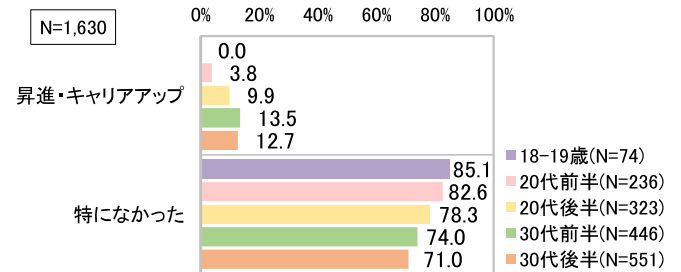


5 女性特有の制約などについて

- ✓ 女の子・女性だからという理由でできなかったことを問う設問では、年代が上がるほど何らかの制限・制約があったとの回答割合が高くなった。「昇進・キャリアアップ」は30代が他の年代より高く、社会に出てから男女の格差を感じる場面が多くなると推察される。

▶ 第II部第5章-1 (P24)

女の子・女性だからという理由でできなかったこと一年代別【複数回答】



6 過去の傷つき体験などについて

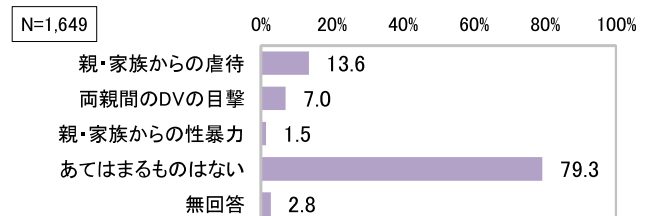
- ✓ 子ども時代を過ごした家庭で、親や家族からの虐待／性暴力、両親間のDVの目撃のいずれか1つでも体験したことがある人の割合は、17.9%。体験者の6割強（63.7%）が今も心身や暮らしに悪影響があると回答。

▶ 第II部第6章-1 (P29)

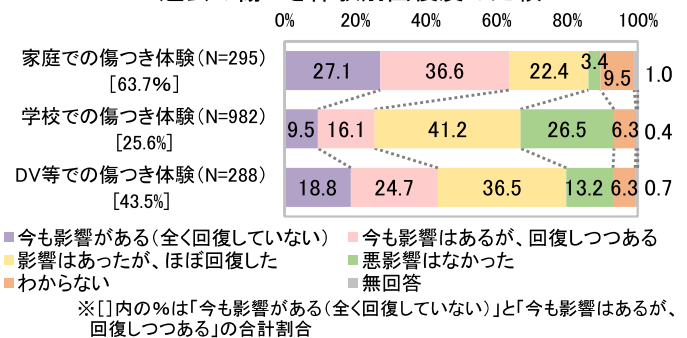
- ✓ 子ども時代を過ごした家庭での傷つき体験、学校での傷つき体験、DV等での傷つき体験の3つについて、今に続く影響と回復度を比較した。家庭での傷つき体験は、他の傷つき体験と比べ、今も影響がある割合が突出して高い。

▶ 第II部第6章-5 (P41)

子ども時代を過ごした家庭での傷つき体験【複数回答】



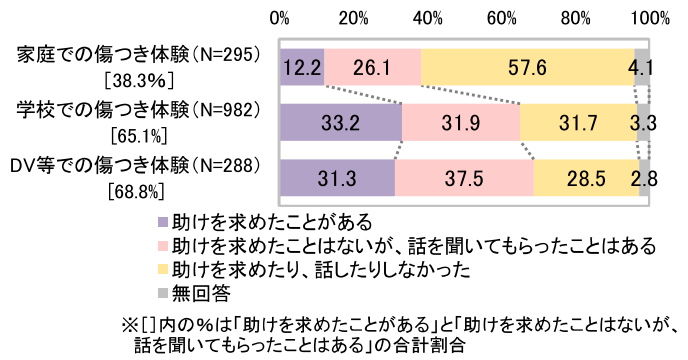
過去の傷つき体験別回復度の比較



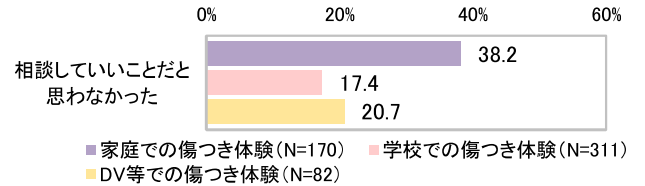
- ✓ 子ども時代を過ごした家庭での傷つき体験、学校での傷つき体験、DV等での傷つき体験の3つについて、相談行動を比較した。「助けを求めたり、話したりしなかった」割合は家庭での傷つき体験で6割弱（57.6%）と突出して高く、その理由として「相談していいことだと思わなかった」の割合も顕著に高い。家庭での傷つき体験は相談しづらく、被害を認識しにくい状況が推察される。

▶第II部第6章-6 (P41)

過去の傷つき体験別相談行動の比較



過去の傷つき体験別相談しなかった理由【複数回答】

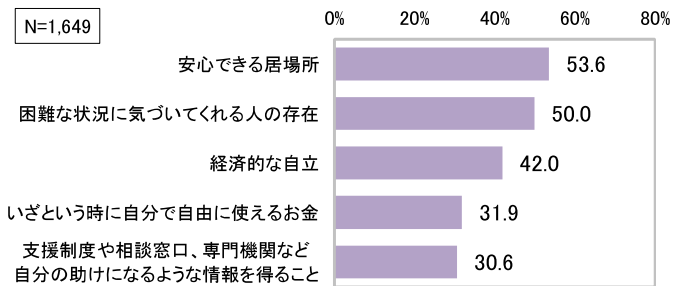


7 女性に対するサポートなどについて

- ✓ 女性が困難な状況から回復するために必要なことの上位は、「安心できる居場所」（53.6%）、「困難な状況に気づいてくれる人の存在」（50.0%）、「経済的な自立」（42.0%）。「居場所」や「人」といった日常の環境や人間関係が回復のために必要と考えている人が多い。

▶第II部第7章-2 (P45)

女性が困難な状況から回復するために必要なこと【複数回答(3つまで)】



アンケート詳細分析 ▶第III部 (P51)

現在困難を抱えている人の状況や背景を詳しく分析しました。

1 現在、困難を抱えている人について

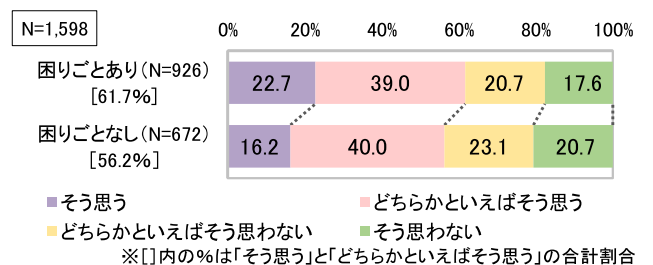
- ✓ 現在の困りごとを問う設問で何らかの困りごとがあると回答した人と、困りごとがない人で、どのような違いがあるかを分析した。経済面での性別役割分担意識を肯定する割合は、現在困りごとがある人が困りごとがない人に比べてやや高くなっている。

▶第III部第1章-1(3) (P53)

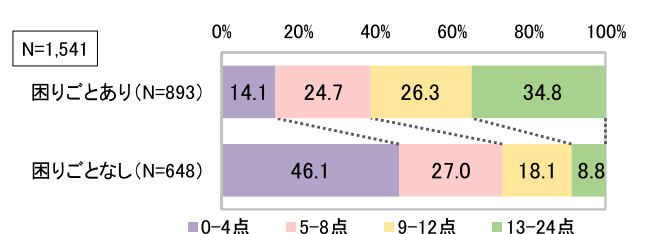
- ✓ 現在困りごとがある人は、困りごとがない人に比べ、心の健康状態が悪い傾向がある。メンタルヘルスを測定する尺度であるK6得点を比較すると、精神的不調の度合いが「重度」（13点以上）の割合は34.8%で、困りごとがない人（8.8%）の約4倍となっている。

▶第III部第1章-1(4) (P54)

現在の困りごとの有無とジェンダー観
／交際相手や結婚相手は、自分以上の収入があるべきだ



現在の困りごとの有無とK6得点の分布



2 困難の背景にある15歳当時の暮らし向き

- ✓ 15歳当時の暮らし向きを問う設問で、苦しかったと回答した人と、それ以外の人で、どのような違いがあるかを分析した。現在の困りごとをみると、15歳当時の暮らし向きが苦しかった人は、「家計が苦しい」、「メンタルヘルスの問題を抱えている」の割合がそれ以外の人それぞれ約2倍となっている。

▶ 第III部第2章-1(1) (P58)

- ✓ 15歳当時の暮らし向きが苦しかった人は、それ以外の人と比べ、子ども時代を過ごした家庭で「親・家族からの虐待」を体験した割合がそれ以外の人約3倍、「両親間のDVの目撃」を体験した割合が4倍弱となっている。

▶ 第III部第2章-2(6) (P65)

3 過去の傷つき体験から未回復の人の傾向

- ✓ 子ども時代を過ごした家庭での傷つき体験、学校での傷つき体験、DV等での傷つき体験、望まない妊娠のいずれかの傷つき体験から未回復の人の傾向を分析した。現在の困りごとをみると、過去の傷つき体験から未回復の人は、「家計が苦しい」の割合が回復した人の2倍強、「メンタルヘルスの問題を抱えている」の割合が4倍強、「人間関係がうまく築けない」の割合が約3倍の値となっている。

▶ 第III部第3章-1(1) (P67)

4 15歳当時の暮らし向きと現在の困難の関係

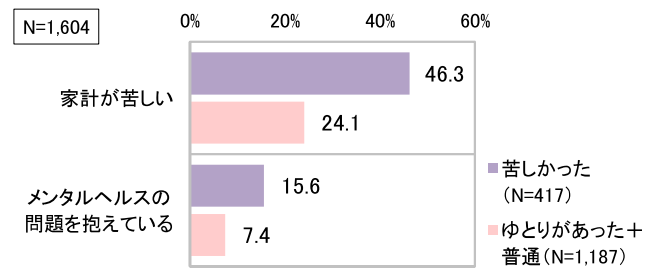
- ✓ 15歳当時の暮らし向きは苦しかったが現在は困難を抱えていない人と、現在も困難がある人の違いを比較し、困難を抱えるリスクが高い状況にあっても困難に陥らない要因を分析した。15歳当時の暮らし向きが苦しかったが現在困難を抱えていない人は、15歳当時に「自分のことを気にかけてくれる大人が周囲にいた」などの回答割合が高く、周囲の大人からの適切な関わりがあったと考えられる。

▶ 第III部第4章-1 (P75)

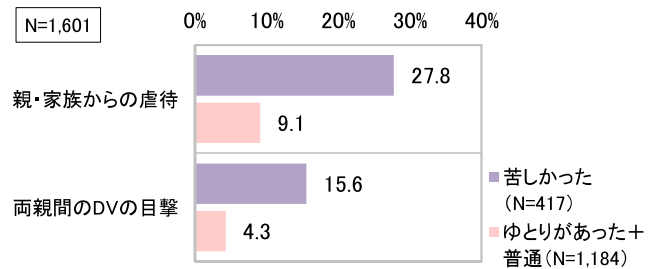
- ✓ 15歳当時の暮らし向きが苦しかったが現在困難を抱えていない人は、現在も困難がある人に比べ、自己肯定感が高い傾向がある。

▶ 第III部第4章-3(1) (P77)

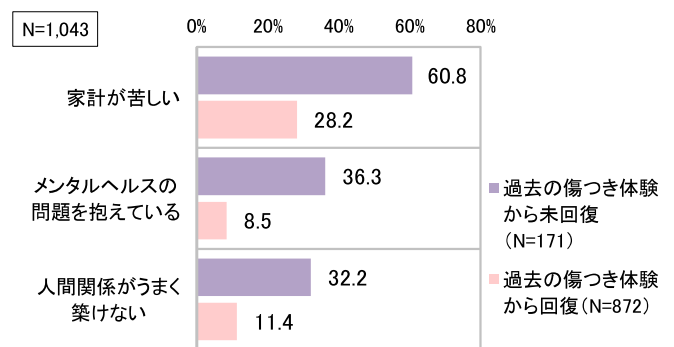
15歳当時の暮らし向きと現在の困りごと【複数回答】



15歳当時の暮らし向きと家庭での傷つき体験【複数回答】

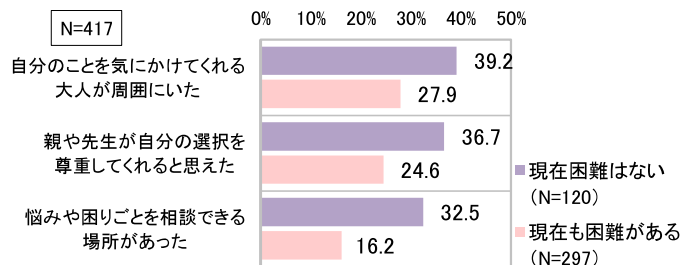


過去の傷つき体験からの回復と現在の困りごと【複数回答】

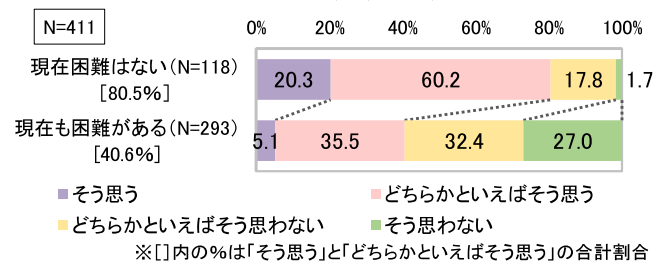


現在の困難の有無と15歳当時の状況【複数回答】

(注: 15歳当時の暮らし向きが「苦しかった」人に限定して分析、以下同様)



現在の困難の有無と自己肯定感
/ だいたいにおいて、自分に満足している



アンケートに回答した1,649人のうち、312人が自由記述欄に記載。多くの人が共通して使う単語を抽出し、出現パターンが似ている語の組み合わせを見る分析により、9グループに分類しました。

① 「コロナ」「出産」「子ども」「子育て」「母親」「生活」

子育ての悩みや、子育て支援の要望、コロナ禍の影響、自身と母親との関係にまつわる悩みの記述があった。

- 子育てをしていると、一人の時間も、誰かと話すこともない。
- 病気や障害のある子どもの受け入れ先の拡充。
- 出産後にコロナ禍になり、外出しづらかった。
- 母親の過干渉により人づきあいができない。

② 「問題」「妊娠」「不安」「生きる」「ひとり」「出来る」「分かる」

妊娠・不妊に関することや、ひとり親、ひとり暮らしに関する悩みの記述があった。

- 幼少期の虐待から自暴自棄になり、10代で望まない妊娠。現在、精神疾患を患っている。
- ひとり親でお金の心配がなくなる。
- 独身で、経済・健康面で老後の不安が大きい。

③ 「賃金・収入」「機関」「男性」「職場」「お金」「経済」「難しい」「仕事」「働く」

低賃金や非正規雇用、男性との待遇格差、ハラスメント、仕事と子育ての両立に関する悩みや、家事育児負担を訴える声も目立った。

- 非正規で、次年度の更新のことが常に心配。
- 男女での賃金格差や昇進の差がある。
- ハラスメントが一向になくならない。
- 働いていても結局は、家事も育児も女性がやらざるをえない。

④ 「場所」「情報」「窓口」「相談」「今」「親」「自分」「知る」「考える」

自身の相談体験に関する記述や、相談先の情報・相談のあり方への要望などが寄せられた。親に関する記述などもあった。

- 相談しても前に進まないことが多く、相談機関を転々として疲れた。
- ストーカーやDVの相談窓口を探したが、情報が見つけれなかったことがある。
- 貧困と毒親の束縛で、閉塞感しかない。

⑤ 「困る」「本当に」「人」「支援」「必要」

困難な状況にある女性が支援を求める難しさや、具体的な支援に関する声が寄せられた。

- 問題が生じている時ほどSOSは難しい。
- 助けを求めるのは勇気がいるので、職場やコミュニティでSOSに気づく人が重要。

⑥ 「悩み」「時間」「DV」「受ける」「家庭」「言う」

自身のDV被害や、DVや虐待など家庭の話は人に言いづらいという声が寄せられた。

- DVを受けていたころ電話が使えなかったので、SNSやチャットなどで相談できるといい。
- 「家庭のことを外に相談すべきではない」と洗脳され、相談できるまでに長い時間がかかった。

⑦ 「気持ち」「辛い」「少し」「ありがとう」「良い」

辛い気持ちや体験、謝意が寄せられた。

- 辛い過去が今も心に影を落としていることを再認識した。
- 相談先リーフレットが参考になった。

⑧ 「仙台」「住む」「感じる」「女性」「アンケート」

アンケートへの意見や結果を知りたいという声が寄せられた。

- アンケートが仙台の女性たちの未来に役立つことを願う。

⑨ 「学校」「教育」「環境」「増える」「社会」「関係」「安心」「お願い」「多い」

学校や教育、仙台市への意見が寄せられた。

- 性教育や経済教育が十分ではない。
- 子どもを産みやすい、育てやすい市に。
- いじめやセクハラ、DV、望まない妊娠や貧困などいつ誰が当事者になってもおかしくない。相談窓口の周知、若い人がアクセスしやすい環境づくりを。

当事者ヒアリング結果 ▶第V部 (P90)

当事者9名へのヒアリング調査では、困難な状況の背景に家族からの暴力など様々な問題があることが明らかになりました。当事者が求める支援やその効果について、以下のような発言がありました。

家庭の問題がその家族にしか解決できないとしたら、その家は地獄のまま。外から入っても良かった方がいい。できるだけ子どものうちに状況を変えるきっかけがほしかった。

相手から来てほしい。前のめりの支援。

虐待、性・からだのこと、生活保護など、本当に生活に必要な情報を学校で教えるべき。

相談場所は交通の便が良い駅周辺で、人目に付きすぎず、あからさまに「ここは相談です!」という感じではないところがいい。

みんなが行くような商業施設などに、若い女性や困っている女性が目にできる情報・パンフレットがあるといい。

適職を探す支援、生活保護以上の収入が得られる仕事の紹介、正規雇用で長く働くための支援などがほしい。

支援者同士がつながっていたら、状況は変わっていたと思う。一人の人の問題は多岐にわたるので、得意な支援を勧めるだけでなく、他の選択肢があることも教えてほしかった。

自分が受けた行為が虐待であるという認識がなかった。支援者からそれは虐待だと言われて、ありえないことだったと気づけた。

被害に遭ったのは自分のせいだと話したら、あなたは悪くないと言ってもらえて救われた。

一人じゃないという希望が持てた。

調査結果のまとめ ▶第VI部第1章 (P97)

アンケートと当事者ヒアリングで見えてきた若年女性の困難の特徴と背景をまとめました。

結果1 「今」の生きづらさとジェンダー規範

- 回答者の半数以上が現在何らかの困りごとがあり、また、生きづらさを感じている。K6を用いた心の健康状態を測る設問では精神的不調の度合いが高い傾向がみられた。
- 交際相手や結婚相手に自分以上の経済力を求める割合は約6割にのぼる。経済面での性別役割分担意識を肯定する割合は、現在困りごとがある人が困りごとのない人に比べて高く、非正規雇用やワンオペ育児など女性がおかれている現実の厳しさの反映という見方もできる。

結果2 ライフコースに影響を与えるジェンダーの制約や様々な出来事

- ジェンダーの制約や、ライフステージが変わる時期に大きな出来事を体験したことが、長期的なライフプラン・キャリアプランの選択に影響を与えている。女性だからという理由でできなかったことを問う設問では、30代で「昇進・キャリアアップ」と回答する割合が他の年代より高く、社会に出てからのほうが男女の格差を感じる場面が多いと推察される。
- 東日本大震災で何らかの影響を受けた人の割合は、30代（震災当時19歳～28歳）が他の年代より高い。新型コロナウイルス感染症の影響では、20代後半から30代前半で「結婚や出産などのライフプランの変更を迫られた」との回答が他の年代より高い。

結果3 過去の困難な体験、特に家庭での傷つき体験が及ぼす影響

- 過去の傷つき体験から未回復の人は、回復した人に比べて現在の生活の中で様々な困難を抱えている割合が高く、ライフコースでも様々なつまずきを経験している傾向がある。
- 家庭での傷つき体験はその後の人生に大きな影響を及ぼすが、相談行動につながりにくい。

結果4 子ども期の貧困や環境が及ぼす影響と困難に陥らないために必要な支援

- 子ども期の貧困が現在の様々な困難やライフコースでの様々なつまずきと関連している。
- 一方、子ども期の暮らし向きが苦しくても現在困難を抱えていない人には自己肯定感が高いなどの傾向がみられた。子ども期の周囲の大人からの適切な関わりが自己肯定感や他者への信頼感、受援力の醸成につながり、その後の人生を生きやすくする要因となることが示唆された。

困難を抱えた若年女性に対する支援を進めるためには、官民が連携・協力し合うことが欠かせません。本調査で明らかとなった問題や背景などを踏まえ、支援に求められるものをまとめました。

1 困難な状況にあることに本人が気づく／生きる力を育む

困難な状況は自分では認識しづらく、特に家庭での問題は相談しづらい。困難に気づき、自分自身を守るための「生きる力」を育む取り組みを成長段階に応じて展開する必要がある。

- ▶ 虐待、性・からだ、性的同意などを知る機会の提供
- ▶ 各種支援制度に関する知識や家計管理など、ライフスキルを身につける機会の提供
- ▶ 自己肯定感・受援力・他者への信頼感を育む取り組み

2 周囲が困難を見つける目を持つ

当事者が助けを求めた際は取りこぼさずに支援につなげられるよう、周囲が困難に気づき、アプローチできる環境づくりや、若年女性が困難に陥る背景について理解を広げる必要がある。

- ▶ 困難に気づく、声をかける、支援につなぐ人（センサーが働く大人）を増やす
- ▶ 身近な大人が正しい情報や知識を持つ
- ▶ 若年女性が抱える困難の実態を市民に周知する

3 アウトリーチによる支援

本調査で「前のめりの支援」を求める声があったように、既存の支援窓口等でもアウトリーチ型の積極的な関わりの場をつくることで顕在化していない対象者の支援が可能になると考える。

- ▶ 相談を「待つ」のではなく、積極的にアプローチする

4 相談のインフラ化／多様な居場所づくり

気軽に立ち寄れて話ができる保健室のような居場所を街中にいくつもつくることや、支援者同士が連携し、一緒に問題解決につなげる仕組みをつくる必要がある。

- ▶ カジュアルに頼れる多様な居場所をつくる
- ▶ 若年女性が立ち寄る場所に支援情報を展開する
- ▶ 支援機関同士の連携

5 経済的エンパワーメント／つまづきがあっても自立・自走できる支援

性別にかかわらず、誰もが経済的に自立でき、自分の人生を主体的に歩むための経済的エンパワーメントに向けた取り組みや雇用環境の整備を社会全体で行っていくことが求められる。

- ▶ 誰もが学ぶことのできる経済的支援の拡充
- ▶ 安定した収入を得るための就業支援等の拡充
- ▶ 経済的エンパワーメントの重要性を盛り込んだキャリア教育

詳しい調査結果や有識者からのコメントは、報告書本体をご覧ください。

実施主体・問い合わせ

仙台市 市民局 市民活躍推進部 男女共同参画課 電話：022-214-6143 メール：sim004180@city.sendai.jp
 公益財団法人せんだい男女共同参画財団 電話：022-212-1627 メール：sola3@sendai-l.jp